北海道における中小企業家同友会の教育と大久保尚孝氏

竹田　正直
（北海道大学）

要　旨

中小企業家同友会全国協議会（略称，中同協）の2013年第１回社員教育委員会が，2013年８月29日（木）午後１時から，東京・中野サンプラザホテルでおこなわれ，中同協からの依頼で，筆者は「北海道における中小企業家同友会の教育」の講演を行った。また，その講演をもとに『企業環境研究年報』（2014年）への執筆を依頼されたのが本論文である。講演依頼は，中同協元全国常任幹事・全国社員教育委員長・全国副会長を歴任し，同友会の発展，とくに社員教育の発展に貢献され，残念ながら，2013（平成25）年２月19日，肺炎のため満83歳で永眠された大久保尚孝氏を偲んでということであった。

本論文は，中同協の全国会員企業総数の13％を占める5,673名（2013年末）が加盟している北海道中小企業家同友会（略称，北海道同友会）の発展の要因の１つとして社員教育（共育）の重視と組織性，継続性にあると筆者は考え，①北海道同友会の結成，②中堅幹部養成の同友会大学の創立（1981年），③“還暦”を迎えた近年の同友会大学第60期の，３つの対象時期の北海道同友会の社員教育（共育）のありかたと大久保尚孝氏の影響・貢献を分析したものである。

「はじめに」では，本論文執筆の経緯と課題，依拠した公刊論文について触れている。

第１章の「中同協・北海道同友会の結成」では，中同協結成（1969年11月17日）の影響のもとに北海道同友会が，1969年11月22日に結成された経緯と，結成当初の基本方針や目的における社員教育（共育）視点の弱さ，及び，大久保尚孝氏の略歴と第一銀行（現みずほ銀行）を退職しての同友会への参加のプロセスを分析した。

第２章の「社員教育の課題と同友会大学の設立」では，中堅幹部養成を目的とする同友会大学の創立への取り組み，大久保尚孝氏の総合的人間力の形成をめざす人材教育論，および第１期同友会大学の内容と成果を分析した。

第３章の「60期を超える同友会大学の発展」では，近年の北海道同友会大学第60期の講義概要にみる大久保氏の人間観，受講生の成績や答辞を通じての成果の分析を行っている。

なお，各章における叙述のなかで，北海道同友会社員教育（共育）の課題を述べているが，「おわりに」のなかでは筆者自身にとっての課題にも触れている。

キーワード

中小企業家同友会全国協議会，北海道中小企業家同友会，社員教育，同友会大学，
大久保尚孝

はじめに

近年の日本経済は，いわゆるアベノミックスによる大企業優遇策で，大企業は一定程度業績回復を示しているが，わが国の企業数，雇用者数，生産高の大部分を占める中小企業は，アメリカを震源とするリーマンショックの大不況や東日本大震災の打撃から未だ回復できないでいる企業が圧倒的である。

その日本の中小企業にあって困難ななかでも「ピンチをチャンスに」する気概と活力を持って前向きに経営に当たっている経営者が多く加入し活気ある経営者団体が，中小企業家同友会全国協議会（略称，中同協）である。中同協は，1969年11月17日の設立総会以来45年目を迎え，全国すべての都道府県に地域組織をもち活動している。

なかでも，北海道中小企業家同友会（略称，北海道同友会）は，この不況のなかでも着実に参加企業を増加させ，いまや5,673名（2013年末）の加盟となっている。この会員数は，中同協の全国の会員総数の13％を占めている。北海道は，人口比率では全国の4.3％弱で，食料自給率200％余に見られるように農業，漁業経営が多く，中同協会員の圧倒的部分の商業，製造業，工業経営の相対的に低い比率のなかでの「全国の会員総数の13％」は，数字以上の大きな意義を有している。

北海道同友会の発展の要因は，一概にいうことはできず多様性を有しているが，筆者はそのひとつの大きな要因として，北海道同友会の社員教育の重視と組織性，継続性にあると考えている。北海道同友会結成後，一定の力量の蓄積に対応して，新入社員教育，フォローアップ研修，マナー教育，同友会大学，経営者大学，同友会大学同窓会研修会，また，近年は，北洋銀行や北海道銀行と提携し，合同社員教育を開催すなどウイングを広げている。

北海道同友会の社員教育の重視と組織性にとりわけ大きな影響力をもたらしたのが，北海道同友会前相談役の大久保尚孝氏であった。大久保氏は，1970年に第一銀行（現みずほ銀行）を退職して北海道中小企業家同友会の初代事務局長（常任理事）に就任し，43年間にわたり，北海道同友会専務理事，代表理事，相談役，全国常任幹事，全国社員教育委員長，全国副会長を歴任し，同友会の発展，とくに社員教育の発展に中心的役割を果たした。残念ながら，2013（平成25）年2月19日（火）午前10時35分，肺炎のため永眠した。満83歳の輝かしい生涯であった[1)]。

大久保尚孝氏の功績を偲びつつ，北海道同友会の社員教育への大久保氏の影響や足跡を述べてみたい。そのさい，北海道同友会の創立から同友会大学設立の時期を中心に第１章と第２章で述べ，第３章では，第60期同友会大学の内容と結果について触れたい[2)]。

第１章　中同協・北海道同友会の結成

（１）中小企業家同友会全国協議会の設立総会

第二次世界大戦末期の米軍による激しい空爆により首都東京の企業・工場は大打撃を受けた。戦争による工場焼失は，東京では従業員10人未満の工場の51％，10人以上100人未満では42％，100人以上500人未満は39％，500人以上1,000人未満は30％と，戦争による工場焼失は中小企業により過酷なものであった[3)]。そのうえ，政府の基幹産業重視の政策で，資金と資材は大企業へ優先的に傾斜配分され，かつ，中小企業は重税にも喘いでいた。中小企業経営者は，資金と資材を求め，重税に反対して各地で多様な中小企業の経営者団体を結成しはじめた[4)]。

このようななかで，今日の同友会運動につらなる中小企業家の活動は，1945年８月15日の敗戦直後からはじまっていた。未曾有のインフレーションなどのなかで，中小企業家たちが経営改善，環境改善にたちあがり，1947年５月16

日に，「全日本中小工業協議会」（のちに1954年に「全日本中小企業協議会」に改称，略称いずれも「全中協」）が結成され，中同協の前身となっている。

その後，内部対立で「全中協」が弱体化し，その精神を継承する「日本中小企業家同友会」が1957年４月26日に結成され[5]，更に「東京中小企業家同友会」に改称され，神奈川，名古屋，大阪，福岡の同友会と中同協の設立総会を準備した。

中小企業家同友会全国協議会（中同協）の設立総会は，1969年11月17日，既存の５つの同友会，すなわち，東京中小企業家同友会，神奈川県中小企業家同友会，名古屋中小企業家同友会，大阪中小企業家同友会，福岡県中小企業家同友会（以上，５つの同友会で合計640名の会員）と準備会（北海道と京都）から，あわせて代表78名が参加して東京で開催された[6]。

全中協から中同協への道程は，戦後の中小企業家の運動の重要な遺産を継承している。それは，第１に，中小企業家の自主性の確立，第２に，経営の民主化と近代化の必要の認識，第３に，日本経済の復興と発展における中小企業の役割の重要性の認識，第４は，官僚統制への反対，第５に，一党一派に偏しない立場，である。また，克服をめざしたのは，「独善主義」（日本は中小企業のみとなる）や「会議主義」（政府関係機関の会議参加で発展する），「技術偏重主義」（技術の発展偏重で民主的視点の軽視）であった[7]。

大久保尚孝氏は，のちに，日本中小企業家同友会の結成について「日米新時代」に向けて「団体法」で弱小中小企業が整理されようとしていたときに，官主導の「“団体法”の道でなく　自主・民主・連帯の中にこそ　中小企業の生きる道がある」とその意義を見た。それは中同協の３つの目的にも反映している。「第１に，ひろく会員の経験と知識を交流して，企業の自主的近代化と強じんな経営体質をつくろう。第２に，自主的な努力によって相互に資質を高め，知識を吸収し，これからの経営者に要求される総合的な能力を身につけよう。第３に，他の中小企業団体とも連携して，中小企業をとりまく経営環境の改善をめざそう」[8]。

（２）北海道同友会の結成と４つの方針

北海道中小企業家同友会（北海道同友会）は，1969年11月22日に結成総会をもった。

大久保尚孝氏によれば，同年６月上旬「業界の仕事で上京した㈱なにわ書房（札幌）の高橋さんと，平和石油㈱（函館）の本間さんが，それぞれ東京の業界仲間から強く誘われ，オブザーバーとして参加することになりました。期待と不安の複雑な気持ちで参加した二人は，二日間にわたる真剣な論議を聞いて，『腰を抜かす程感動した』そうです。帰りの飛行機の中で『こんな会ならぜひ北海道にもつくろうではないか』となり，二人が知り合いの経営者によびかけ，７月22日，札幌，小樽，函館の有志が集まり，十数時間ぶっ続けで話し合い，北海道における同友会運動の基本方針を決めました」[9]。

決定した基本方針。１，自分だけでは勿論，同業組合では解決できない問題，出せない悩みを語り合い，激論し援け合う同友会，２，会員の一人ひとりが近代経営に脱皮し，隆盛になる道を探求し合う同友会，３，金融，税制，労務，貿易などの経営問題や，時事問題の講演会，研究会の他，いろいろな話し合いを通じて腹を割って経験交流を行う同友会，４，あらゆる中小企業団体と提携して，中小企業のさまざまな要望を訴え実現する同友会。

結成総会（札幌第一ホテル）に出席したのは，25名で他に委任状参加が９人であった。㈱薬のヒグチの樋口社長（大阪同友会代表幹事代行）が，「私の経営哲学」を語ってくれたし，名古屋同友会からも参加してくれた[10]。

大久保尚孝氏は，上記の４つの基本方針について次のように述べている。「この方針は，北海道同友会20年の歴史を通じていまなお脈々として生きいき続けています。」[11]

たしかに，この４点の基本方針は，今日に至るも生き続けている。しかし，中同協全体としても，とくに北海道同友会として，その特徴的，中心的課題として取り組んでいることが，十分には方針化されていない。それは，大久保尚孝氏自身が提起した３つの目的の１つ，経営者自身の総合的能力の形成，「社員と共に育つ」という人材育成が初期の方針には弱かったのである。３点目の「腹を割って経験交流を行う同友会」が，「総合的な能力」を身につけることに通ずる。しかし，「自主・民主・連帯」とならんで「共学・共育・共生」こそ，同友会発展の，中小企業経営隆盛のカナメであるとの強く深い認識は，１～４点の方針には見られない。

結成総会では，規約が提案され満場一致採択された。提案者の太田一彦氏（札幌，恒星設備㈱社長）によれば，事前討議での修正は４点で，第１点は，第３条の，政治団体とは一党一派に偏せず，は判りきったことなので削除。第２点は，第７条の入会金，当初5,000円を，一法人3,000円に。第３点は，第８条，理事会の成立要件を，過半数と挿入。第４点は，第９条，会長のみの案を，正副会長とし職務を明文化，したことである。

第３条は目的で，全文は次のようになっている。「この会は中小企業家のための自主的，民主的組織として，すべての中小企業団体と提携し，中小企業家の社会的，経済的地位を向上させ，平和的な均衡のとれた国民経済，地域経済の発展に寄与することを目的とします」[12]。この目的実現のため第４条は事業で，５点の事業をあげている。

「この会は会員の多種多様な要望に応えるため次の事業を行います。

（Ⅰ）各種の経験交流，経営研究，協同事業及び機関紙の発行。

（Ⅱ）会員相互の親睦を深め，中小企業家の団結を推進すること。

（Ⅲ）会員の経営に対する取り組みの姿勢を正し，中小企業の発展に役立つこと。

（Ⅳ）大資本本位の経済政策や中小企業に対する官僚的指導の是正につとめること。

（Ⅴ）全国各地の同友会との交流をはかることなど，この会の目的を達成するのに必要とおもわれること。」[13]

第５条で，会員は，「中小企業家およびこれに準ずる人々」とあり，「準ずる人々」の規定はとくにないが，後述の役員名簿によると中小企業の「専務」や「常務」が想定されている。また，会員になるには，会員一名以上の推薦と常任理事会の承認を必要とした。

会費は，第７条で，入会金一法人3,000円と，月額2,000円を３ヵ月前納制とした。機関は，第８条で，「会員総会」（定時総会は年１回），「理事会」，「常任理事会」であり，役員（第９条）は，理事，常任理事，理事長（常任理事の互選），会長・副会長，会計監査で，役員任期は１年で再任を妨げない。「全国協議会への加盟について」の議案が本間貞雄氏（函館，平和石油㈱社長）からなされ，「自主・平等の立場で協力し合う協議体である」として，審議の結果，全員一致で中同協への加盟を決議した。

結成総会で決定された規約の目的や５つの事業をみても，「総合的な能力」を身につけることこそ中小企業発展のカナメであるとの人材養成への強いメッセージは感じられない。

役員選考は総会で「札幌２名，小樽，函館，旭川より各１名，合計６名」の委員が選出され，休憩時の第１回理事会後，選考委員会の提案は全員一致総会で承認された[14]。

札幌：太田一彦常任理事（恒星設備㈱社長），今田幸司常任理事（㈱ナニワ商会常務），高橋通泰理事長（㈱なにわ書房専務），田辺　巌常任理事（㈱田辺無線電気商会社長），三浦隆雄常任理事（㈱サンコー社長）。

小樽：井上良次常任理事（㈱光合金製作所社長），高橋寛一理事（北海道紙問屋㈱社長）。

函館：沼　武夫理事（北邦製機㈱社長），本間貞雄常任理事（平和石油㈱社長）。

旭川：畑　正男常任理事（㈱畑機械工業所社長），

安井一雄理事（㈱銀座センタービル社長）。

監査：今野秀夫（北海道機関紙共同印刷所社長），千葉幹治（㈱まるせん常務）。

問題は，正副会長についてである。『同友会ニュース』創刊号には，「正副会長に推したい候補として，吉村伝次郎（三馬ゴム社長），大川信夫（北海道食糧事業協組専務），高橋寛一（北海道紙問屋㈱社長），浪花剛（なにわ書房社長）四氏をえらび，就任要請をおこないたい」[15] と，あるだけで，要請結果は明示されていない。また，その後，全員が就任したのか，会長は置かれたか否かも，現時点では，確定する資料を入手していない。

なお，結成後，５ヵ月間で会員89名（80社）と２倍以上となり，1970年４月19日（日）に札幌林野共済会館（井上一郎㈱光合金製作所会長によれば，現在の札幌ホテルロイトンの近く）で第２回総会を開き，総会で新理事21名とともに（会長は不選出）次の４氏への副会長に就任依頼を決定している。全提案は満場一致採択された[16]。

副会長：吉村伝次郎氏（三馬ゴム㈱社長），高橋寛一氏（北海道紙問屋㈱社長），越沢幸三氏（北産機工㈱社長），浪花剛氏（㈱なにわ書房社長）。

それにしても，東京同友会から２人が呼びかけられて準備会に参加し，すぐに結成を決意して，第１回結成総会の出席25名，参加欠席９名と34名の中小企業家を結集し，中同協結成の５日後に結成総会を開催し，規約や活動方針，役員体制を満場一致決定するまでの短時日に発揮された結成時会員の中小企業発展への熱意は並々ならぬものを感じる。さらに，結成後５ヵ月で第２回総会を持ったときには，89名（80社）の会員という急増をもたらした北海道の中小企業家たちの真に自主的，民主的で，連帯しうる同友会への渇望の広さと深さ，思いの強さを感ずる。こういう経営者に大久保氏は懇望された。

（３）大久保尚孝氏の略歴と北海道同友会への参加

大久保尚孝氏は，世界大恐慌の年，1929（昭和４）年９月に，神奈川県海老名村（現・海老名市）に生まれた。父の大久保徳吉氏は，神奈川県農業試験場の養蚕技師をしており，母の大久保秀子氏は，慶応大学付属病院外科看護婦（現・看護師）の経験をもち，ともに27歳で結婚したご両親の第２子，２男２女の長男として生まれた。なお，母秀子氏は結婚後，助産婦（現・助産師）を開業していた。大久保氏の回想に寄れば，父の徳吉氏は，同県人の大先輩二宮金次郎を心から尊敬し，農本主義というべき立場で，農民の痛みから出発し，「主観的には常に農民の立場に立っていた人でした。」[17]

しかし1937（昭和12）年７月，日中戦争が開始され，中国への侵略が本格化し翌年「国家総動員法」が公布される情勢のもとで，加藤完治が中心となって「満蒙開拓青少年義勇軍」[18] がつくられ，父の徳吉氏は，加藤完治の呼びかけに応えて，茨城県の内原訓練所に第１期幹部候補生として入所し，北満に渡り「北満に大久保あり」といわれた。1942年10月，父の徳吉氏は公務中に落馬事故で41歳の若さで急逝した。

後に，大久保尚孝氏は，「なぜ父はもっと大局をみることが出来なかったのか」「客観的に物ごとをみつめ，科学的，歴史的な立場からその本質をつかむことが，どんなに大切かということを教えられた思いです」[19] と回想している。とはいえ，父から学んだこともある。それは，１，汚いことはするな，人間正攻法で生きられなければ価値はない。２，部下を持ったら，どんなに専門的なものでも，部下の仕事に精通するだけの力をもて。３，熟慮して一旦決めたことは，命をかけてやり抜け。出来て当たり前，出来なければ恥と思え。４，勉強は生涯し続けるもので，限界はない。という教訓であった。

母の秀子氏は，結婚後は助産師を開業したが，近隣４ヵ村で開業していた３人の助産師のなかで，秀子氏が出世児の７割をとりあげていた。

それは，外科看護師の貴重な経験が，医師のいない地域ではとても重要な経験であったこと，「母は貧乏人からはお金をもらわず，金持ちからは遠慮せずに料金をもらっていました」こと，当時，朝鮮の人たちへの心無い日本人や学童の蔑視や差別を烈火のごとく怒り，決して差別しなかったこと，いつも「他人の役にたてる人が世の中で一番立派な人」と言い，実践していたからでした。

大久保尚孝氏が，母に学んだことは，１，勉強は世の中のためになる方向でするものである。２，自分の価値は，周りの人が決めることで，生きるも死ぬも世間に任せなさい。３，愛は，学問と経験で裏打ちし，相手にとって本質的に役立つように示すことである。４，主観的な努力では，悪魔に手を貸すことになる恐れがある。５，いつも，世の中の下積みで苦しんでいる人の痛みをわが痛みとするような生き方をおしえられた[20]。

母秀子氏は，夫が北満で41歳で急逝した1942年10月から，戦中と戦後の過酷な時代を必死になって４人の子どもたちを育て，1946（昭和21）年夏，余命３ヵ月の末期がんと告げられた。そして，大久保尚孝氏が答辞を読んだ藤沢商業学校５年の卒業式当日が，母の葬儀と同じ日となったという。大久保氏は進学せず，1947年４月から帝国銀行に勤務した。翌年４月から第一銀行と三井銀行に分行したため，第一銀行勤務となった。残された妹や弟のために農家の物置の２階を借りて住み，朝と夜に畑仕事をし，時には家庭教師もしながらの銀行勤務で，1949年肺結核になり上葉摘出手術を受けた。1955年に片桐キヨ氏と結婚し，長男尚徳氏（1957年８月）と次男尚人氏（1960年９月）が誕生。1970（昭和45）年４月，乞われて23年間勤務した第一銀行を退職して北海道中小企業家同友会の初代事務局長（常任理事）に就任した[21]。

第２章　社員教育の課題と同友会大学の設立

（１）中小企業発展と大久保尚孝氏の人材育成論

大久保尚孝氏が，銀行を退職して初代北海道同友会事務局長（常任理事）に就任した経緯について，よくまとまっているのは，2012年11月に中同協によって刊行された『新・共に育つ』の，インタビューである。中同協副会長国吉昌晴氏が聞き手である[22]。

大久保氏は同友会との出会いについて次のように答えている。「第一銀行札幌支店（現みずほ銀行）で貸付係をしていた頃，政治や経済に関する本を，市内中心部にある書店なにわ書房にたのんで買っていました。なにわ書房の専務（高橋通泰氏，北海道同友会初代理事長―竹田）が『札幌の銀行員にしては珍しく難しい勉強をする人だ』と関心をもったらしく，ある日面会を求めてこられました。

いろいろ話し合っている中で，『これからの経営者には相当幅広く科学的な認識力がなければ激動する情勢に対応できない』という共通の考えを持っていることが分かりました。その後何度かお会いしている内に，経営者が自主的に経営問題を勉強する組織を作りたいので力を貸して欲しいと頼まれました。私にとっては仕事の一部ですからお手伝いをすることにしました。（中略）三ヶ月程経って『例会のセッティングがうまくいかないので，専任役員として事務局長を引き受けて欲しい』との申し出がありました。」[23]

大久保氏は，引き受けたが，はじめは「事務所もなく会員も少なくて，とても給料なんて貰える状態ではなく，しかも，事務用品から交通費，電話代などは殆ど私が負担するありさまでした。」しかし，大久保氏は，この困難も「今になってみれば，創業者たちがどんな思いと努力で会社を創ってきたのかを体験出来て，とて

もよかった」とプラス思考で考えている。困難ななかで，”孤独感“におそわれることもあったが，そのときの支えは，「①同友会の理念と運動の可能性　②中心になっている人たちの人間的信頼感でした」という。そして，これが，「中小企業における従業員のやる気を起こさせるには，経営理念と経営者の人間的な確かさこそ」という北海道同友会の社員教育理念を生み出す基になった[24]。

大久保氏は，まず，銀行時代に旧知の，有力な20名ほどの経営者に入会を呼びかけた。さらに，それらの経営者に経営体験を披露してもらい忌憚のない話し合いを行い，お互いに感動する学び合いを行った。当時は，高度成長期で，道内でも大企業による「青田買い」が展開され，中小企業には，「若者が来てくれない，定着してくれない，育たない」が，北海道同友会会員各社の共通した深刻な悩みであった。その解決に３点の課題を推進した。

「第一に，中小企業の社会的な信用を高めるために，企業の経営体質を自力で強化し，労働環境を整え，経営指針を確立し，就業規則の作成・見直しを進める。

第二に，社員の誇りとやる気を引き出すために，労使がともに学び合う姿勢で経営者が先頭に立って，学者や教師の協力を得ながら『共育』活動を推進する。

第三に，上記の成果を示しながら，地域との“共学，共育，共生”の関係を創造できる中小企業の持つ可能性を，学校や父母に訴えていく。」[25]

大久保氏は，高度成長の反動を予測し，そのさい，不動産の蓄積という意見もあったが，結局は，「どのような激動にも対応できる力は，労使の信頼関係をベースにする人間力」の蓄積であると理事会で一致した。そこで，井上良次常任理事（その後代表理事，㈱光合金製作所社長）から「光合金の人育て」の戦略と体験を聞いたが，人間性あふれる豊かな内容で，その報告は，その後の北海道同友会の社員教育の推進に大いに役立ったという。

国吉昌晴氏によれば，「大久保さんは，前職であった銀行の貸付担当の職務を通して，『中小企業の最大の弱点は人材の確保と育成にある』と認識」していたという。大久保氏は，社員教育委員会では，（１）会内で一番要求の強い『中堅幹部教育』と『若い社員に対するマナー教育』から始める，（２）講師は，経営者，事務局，同友会の理念を理解する教授・教師にお願いし，研修業者（コンサルタント）は頼まない，（３）内容としては，表面的な現象に惑わされない力をつけるために，科学的・体系的に学ぶ，（４）マナー教育には，同友会のオリジナルテキストを作る，（５）どの教室でも，今の情勢について学ぶ，ことを確認し，自ら「真の教養を積む」マナー教室のテキストを作成し開始した[26]。ついで，大久保氏は社員教育が「企業にとって宝物」の「人財」ではなく，「限りなく成長し，世のため人のために役立つことができる可能性をもった人」としての「人材」の育成であると確認し，幹部養成の「同友会大学」の1981年１月開講を目指して取り組んだ。

（２）「同友会大学」の開講をめざして

同友会大学の開講へ向けて，大久保氏は，「北大教育学部，北海道教育大学などの先生方と社員教育委員会のメンバーが『教育とは何か，人間が育つとは』について懇談を重ねて」，本来の教育は，「自分で考え，課題を見つけ，実践して，社会に役立ちながら生きていける能力を身に付けさせるようにサポートすること」となったという[27]。

そして，同友会大学の継続性を保証する条件としていた，北海道同友会札幌支部会員が，1,000名を突破し，1,200会員に達したこともあって1981年１月13日（火）から，４月28日（火）まで30講，５月12日（火）卒業式という日程で準備した。

この同友会大学の準備に当たっては，社員教育委員会での討議が基本であったが，実務的に

は，1974（昭和49）年５月から専務理事に就任していた大久保氏とともに，国吉昌晴北海道同友会事務局長（現・中同協副会長）の役割も大きかった。

国吉昌晴氏は，1966（昭和41）年３月に北海道大学教育学部を卒業して，1972年から北海道同友会事務局次長になり，ついで，大久保氏が専務になったあとの事務局長に1974年５月から就任した。その後，1984年に中同協事務局次長に転出するまで，とくに，同友会大学の結成と初期の実施を，大久保氏と協力して行った。

国吉昌晴氏は，北大教育学部では社会教育講座に所属し，教育社会学的研究で数多くの実証調査研究の成果を公刊していた布施鉄治教授の指導で北海道美唄市周辺農村の生産・生活と住民の意識調査をおこなって卒業論文を執筆した。また，北大教育学部には，全国の総合大学教育学部で唯一の，企業内教育を研究・教育する産業教育講座があり，経済学の視点から経済発展と人材教育の研究を行っていた道又健治郎教授の指導も受けていた。

卒業後は，北海道地域経済研究所で北海道の地域経済の基礎データの収集，分析，出版活動を行っていた。のちに，北海道同友会事務局長になって大久保氏とともに社員教育委員会を中心に同友会大学の準備に当たったとき，この北海道地域経済研究所での研究蓄積と道内研究者，大学教員との人脈が大いに役立った。

なお，第１回同友会大学の講師陣，とくに，北海道大学と北海道教育大学の講師陣について，筆者も国吉事務長に意見を求められ，推薦した。国吉氏は，北海道同友会の基礎がかたまり発展軌道にのった1984年に，北海道同友会を退職し，中同協の事務局次長，翌年1985年から事務局長。1996年から専務幹事，2006年から中同協副会長を兼任している。

（３）北海道同友会「同友会大学」第１期の開講

北海道同友会（井上良次代表理事）は，関口功四郎社員教育委員長のもと，1981年１月13日（火）～５月12日（火）の同友会大学第１期を開講した。毎週火，木，午後６時から３時間，Ⅰ～Ⅵ単元28講義，開校式と総括講義，卒業式で計31回。

定員30名で募集したが，40名の受講者が押し寄せた。20歳代から最高52歳まで，多様な職種，役職であった。女性の受講者は１名であった。多くの受講生は，各企業の課長，室長，常務，専務という幹部職員で，それだけに週２回，夜，６～９時の受講，卒業条件の出席率は80％ 24回以上の出席が求められるのは相当厳しいものである。さらに，５回の単元レポートの提出と全体に関する卒業論文の提出と平均点50点以上の条件もあり，土曜，日曜返上でのレポート作成が圧倒的で，受講生自らの自主的努力のほかに，職場の協力はいうにおよばず，家庭の協力もあってはじめて卒業に達することが出来た。道内の５つの大学から９人の教授，助教授が講師陣に参加している。

第１期卒業生は33名であった。平均点は67.3点，最高は平均89点で，卒業論文95点の井原勝美さん（32歳，㈱宇佐美商会総務課長）で，社員教育委員会も「驚嘆すべき成績」と高く評価していた[28]。

同友会大学の開講と卒業式はマスコミにも注目された。まず，『日本経済新聞』は，開講の約３ヵ月前，1980（昭和55）年10月28日（火）付で，「人材養成へ『大学』設置，道中小企業家同友会が一月開講」と三段見出しの大きな記事を掲載した。入学式がおこなわれた1981年１月13日（火）の翌日14日付で『北海タイムス』紙は，写真入りの三段記事を掲載している。見出しは「同友会大学が開講，道内中小企業，次代トップを育てる」である。同じ14日付で『北海道新聞』も三段記事で「中小企業の期待担い入校式，道同友会大学」の見出しで報じた。『北海タイムス』も，『北海道新聞』も，５月12日の卒業式の翌日，13日に，両者とも写真入りで大きく報じている。とくに，『北海道新聞』は，

15日付で最優秀賞を得てトップ卒業した井原勝美さん（32歳，㈱宇佐美商会総務課長）を，「ひと‘81」の写真入り囲み記事で大きく報じている[29]。

第１期卒業生記録『未来へのはばたき，同友会大学第一期生の記録』（国吉昌晴編集責任，北海道中小企業家同友会刊，1981年７月，１～46頁。）では，単元Ⅰ～Ⅴの課題レポートの優秀論文を各数編ずつ掲載している。その中には，自ら第一期生として受講し，長く同友会大学学長であった岡村敏之氏（当時，ダイヤ冷暖工業㈱社長室長，現・ダイヤ冷暖工業㈱代表取締役会長）の単元Ⅲ，企業会計の基礎知識，レポートテーマ，「資金繰りの手順」の優れたレポート「資金繰りの手法，考え方」もある[30]。なお，岡村氏は，９名の皆勤賞の１人でもあった。

最後に，大久保尚孝専務理事が「時代の要請に全面的に応える幹部に，第一期生の講評にかえて」を掲載している[31]。大久保氏は，社員教育委員会で相当厳しく評価したが，予想以上の大変良い成績であったと受講生を高く評価した。そして，「同友会大学の卒業生には，同友会全体の期待と，地域社会からの大きな期待がかけられています。これを出発点として，大きく飛躍されますことを希望いたします」と講評を締めくくった。ここには，「企業のため」「北海道同友会のため」の狭い視野ではなく，全国の同友会や地域社会の期待に応えて欲しいとの，大久保氏の基本的な，広い視野が感じられる。

北海道同友会は，中同協結成直後の創立ということもあり，基本理念は，中同協と同じである。そこには，まだ，経営者自身の教育とともに社員教育が中小企業の発展にとって基本的な重要な課題であるとの意識は薄かった。しかし，大久保尚孝氏が，北海道同友会の初代事務局長になり，次第に，大久保氏が銀行時代に感じていた，中小企業の発展にとっては総合的能力を持った人材育成こそカナメであるとの認識が理事会に浸透してくる。人材の確保と育成は北海道同友会活動の柱となってくる。そこから導きだされた課題は既述のような３点である。

「第１に，中小企業の社会的な信用を高めるために，企業の経営体質を自力で強化し，労働環境を整え，経営指針を確立し，就業規則の作成・見直しを進める。

第２に，社員の誇りとやる気を引き出すために，労使がともに学び合う姿勢で経営者が先頭に立って，学者や教師の協力を得ながら『共育』活動を推進する。

第３に，上記の成果を示しながら，地域との“共学，共育，共生”の関係を創造できる中小企業の持つ可能性を，学校や父母に訴えてゆく。」[32]

これは，画期的な提起であったが，労使問題で苦労している東京，大阪，神奈川の先輩同友会からは，「経営者の資質を問うたり，幅広く勉強しよう」などを求めるのは「中小企業家無能論」に手を貸すもので，社員の信頼を高める上で逆効果だとの反論があった。しかし，時間をかけた討論の結果，現在の「同友会３つ目的」となっている。こういった経緯を経て，大久保氏は中同協の全国社員教育委員長に就任してゆく。

しかし，北海道同友会の同友会大学第１期開講への取り組みの中で，第３の目的にある「地域との“共学，共育，共生”の関係を創造できる中小企業の持つ可能性」の観点から，社員教育を展望する点で，まだ，課題を残していた。

また，筆者としては，北海道同友会や中同協で，社員教育を「共育」ととらえているさいに，「共育」を，いつから，どういう経緯と意味で用い始めたかということがある。

筆者は1964年12月25日公刊の雑誌論文で「共育」を使用している。「教育は“共育”であり，教育の主人公は生徒である」と書き，“共育”は集団を教育する際のカナメともいえる概念とし，第１に集団の成員相互の訓育作用であり，第２に，教育者と受教育の相互の訓育作用である，という２つの内実を有する概念としておよそ50年前から用いている[33]。

第３章　60期を超える同友会大学の発展

（1）北海道同友会の人間観と人材育成の基本

大久保尚孝氏は，北海道同友会結成の動機を，情勢分析をしっかりやって，科学性・人間性・社会性を備えた新しい経営体質にしていかなければならず，お互いの経験や情報を持ちよって，議論しながら学べる場が欲しかったと述べている[34]。

北海道中小企業家同友会の目的は，すでに詳述したように，第１に強靭な経営体質の形成，第２に総合的な能力の育成，第３に社会･経済･政治的な環境改善の３つに集約される。

さらに「合言葉」として，①知り合い，学びあい，援けあい，共に繁栄をめざしましょう！　②きばらず，せかず，諦めず，私たちの要望を実現しましょう！　③激動をよき友とする経営者になりましょう！　を掲げている[35]。加盟企業の相互関係については,「自主」「民主」「連帯」とし，団体依存ではない経営の自立を基本としている。

北海道同友会の結成の動機にも，その目的にも，会員の学びあいが強く意識されている。1984年３月に，当時，同友会専務とともに，中同協の社員教育担当常任幹事でもあった大久保氏は,『同友会における社員教育』を書いている。その中で，同友会の３つの目的の中心的課題は,「強靭な経営体質をつくること」で，そのためには,「人材の確保と育成」が鍵であり,「共同求人活動」と『社員教育』が結合して発展する必要を訴えている。

同友会のめざす人材を,「第１に，周囲から信頼され，他人に思いやりがありリーダーシップがとれる人。第２に，仕事と人生との関わりをしっかりと自覚し仕事の中によろこびや生きがいを見出すことができる人。第３に，物事を大局的立場で本質的に判断でき，自主的・創造的に対応できる人。第４に，心身ともに健康で，私生活を自ら律していける人。第５に，人との触れ合いを大切にし，積極的な謙虚さをもってたえず成長をとげていく人。」と提起している。これを実現するために，第二次大戦後に制定された日本国憲法と教育基本法を原点とし，経営者も従業員も共に学びあうことを社員教育の核心としている[36]。

以上の基本的視点にもとづいて北海道同友会の人材育成はおこなわれているが，今日展開されている教育活動，すなわち，経営者大学，同友会大学，新入社員マナー教室，新入社員フォローアップ研修会，新入社員意欲アップ・職場定着セミナーなど多岐にわたる。なかでも同友会大学が同友会の教育活動の中心になっている。このことを，自らも同友会大学第１期卒業生で永年，同友会大学学長の任にあったダイヤ冷暖工業㈱会長の岡村敏之氏は,「同友会三十年間の心臓部分は，やはり，教育である。その教育の中心部分は，同友会大学である」と述べていることにも現れている[37]。

同友会大学は，2012年１～８月の講義で，第60期を終えた。1981（昭和56）年の創立の直接の刺激となったのは，中小企業大学校の旭川への設置である。これについて同友会の前代表理事の㈱エミヤ代表取締役会長の三神純一氏は，旭川への設置では札幌圏の中小企業家は参加が難しいので，同友会で札幌に大学を作ろうとなったという[38]。

（2）同友会大学第60期の講義内容

第60期の講義概要‘（毎週火曜，６～９時）を示す。受講生46名，内女性11名。

１，入学式（１月16日）

単元Ⅰ，経済と中小企業

２，激動する世界経済をどう見るか
　（北星学園大学教授）

３，中小企業憲章と中小企業振興基本条例
　（同友会役員）

４，転換期の日本経済（北海道大学教授）

５，北海道資本主義発達史
　（北海学園大学教授）

単元Ⅱ，北海道論

6，＜フィールドワーク型，１泊２日研修＞

7，見学企業；㈱江別製粉，㈱日江金属，㈱町村農場，「南幌温泉」泊

8，北海道の経済構造とこれからの展望
（北海学園大学教授）

9，北海道農業の現状と課題
（北海道大学教授）

10，北海道の風土と文学
（北翔大学・短期大学講師）

単元Ⅲ，経営戦略と企業づくり

11，中小企業の組織マネジメント
（北海学園大学教授）

12，中小企業のマーケティング戦略
（札幌学院大学教授）

13，地域に根ざした「ものづくり」
（札幌市立大学教授）

14，経営分析のＡＢＣ（税理士）

15，経営指針に基づく企業づくり
（同友会加盟企業，代表取締役会長）

単元Ⅳ，現代と法

16，日本国憲法の歴史的意義と課題
（北海道大学教授）

17，企業とは何か～会社法を学ぶ（弁護士）

18，債権の管理と回収（弁護士）

19，労働法の基礎知識（北海学園大学教授）

20，知的財産権と中小企業（弁護士）

単元Ⅴ，科学と人間

21，人間の起源と進化（北海道大学教授）

22，地球環境とエネルギー問題
（酪農学園大学教授）

23，産学官連携の成果と可能性
（北海道大学教授）

24，情報化社会と人間（北海道大学教授）

単元Ⅵ，人間と教育

25，教育の本質とは何か
（北海学園大学特別研究員，北海道大学名誉教授，筆者）

26，幹部社員の任務と役割
（同友会加盟企業，代表取締役）

27，＜公開講座＞新しい仕事づくり～挑戦こそわが社のＤＮＡ
（宮城県同友会加盟企業，代表取締役）

28，支えあう職場の関係づくり
（北海道大学教授）

29，社員と共に育ち合う企業づくり
（同友会加盟企業，代表取締役）

総括講義

30，中小企業の未来と私たちの課題
（同友会役員）。

卒業式と祝賀会（８月24日）

以上の講義内容と担当者を見てわかるように，入学式を除く実質，29回の講義のうち，17講が大学教員によってなされている。このことは，同友会大学が，いかに，基礎的な知識や科学の教育を重視しているかのひとつの現われといえる。

なお，同友会大学の入学条件は，①北海道中小企業家同友会の会員企業に，５年以上勤務していること。②年齢が25歳以上（受講中，卒業までに25歳になる社員も入学可能）。③会員企業の経営者の推薦状および受講料負担（以前，個人支払いの若干の例外あり）。

卒業条件としては，①毎週１回，18時から21時までの出席で，７回以上欠席するとその時点で卒業はできないことになる。②また，５単元ごとに，レポートの提出が義務付けられており（提出が，締切日を１日過ぎるごとに，１日につきマイナス５点減点される），５回の平均点が，100点満点で50点以上，③さらに，卒業レポートの提出が義務付けられ，それの成績が，100点満点で50点以上で，かつ，５単元ごと５回の100点満点のレポートの平均点の合計を２で割って50点以上であることが卒業条件である。

同友会大学第60期の講義の中で，筆者が分担した講義は，「単元Ⅵ，人間と教育」の５つの講義のうちの最初，第60期の講義全体の中では25番目に当たる講義で，テーマは，「教育の本質とは何か」である。「単元Ⅵ，人間と教育」

の５つの講義のうちの最初の講義という位置づけから，人間社会の生成と発展及び人間の労働とのかかわりで教育の本質を，そのことのもつ今日的意義を基本的な内容構成としている。

以下に筆者の講義のレジュメを上げる。

教育の本質とは何か
北海道大学名誉教授，北海学園大学特別研究員
竹田正直
はじめに：同友会大学第60期をむかえて
第１部：子育ての歴史に学ぶ教育の本質
（１）学ぶとは，「まねぶ」こと
（２）社会の知と技を組織的に伝える
第２部：義務教育から受教育権への教育本質の転換
（１）義務の教育から権利の教育へ
（２）自由と尊敬と社会的絆の共育
第３部：危機の中での子どもと若者たち
（１）「３・11」後の子どもと学校
（２）危機の中の若者と対応の自戒
おわりに：人間の働く喜びと共育
（１）人間の10個の働く喜び
（２）人々の絆と働く喜び

以上が筆者の講義のレジメであるが，まず，第１部と第２部で「教育の本質とは何か」について具体例を含めて話している。要約すると以下の５点である。

第１に，人間の教育の根源は，人間の生活と労働の過程での知恵や技能の伝達であり，まさに現代では企業内での教育こそが歴史的な教育の原点である。

第２は，知識や技能・技術，感情，人間関係の知恵を伝達するための文字や絵，甲骨，皮，紙などの媒体が発達し，その習得も必要となり，教育活動のために一定の時間，場所，対象，伝達者が生まれ，その習得には自由時間の占有が必要であり，社会の分裂，社会的経済的格差が生まれるなかで組織的教育活動が塾や学校として発生する。

第３に，社会的経済的格差が，本質的に，教育のあり方を規定するとしても，他面，教育が格差を打破する可能性も有していることを，ヨーロッパ中世の遍歴学生や都市学校の発生と発展，日本の郷学の一部に見ることができる。

第４に，国家によって導入された義務教育制度，学校教育は，当然，義務的，強制的側面を有しているが，その後，立身出世の手段，階層移動の意義を経て，子どもの発達保障にとってかけがえのないものとして理解される。

第５に，科学的基礎的教育と自由な創造的「共育」こそが，人間を発達させることを認識してほしい。世界史のなかでの「自由教育」の位置づけと，自由な自主的教育と「待ちの教育力」の関係，「見通しの教育」における理念の教育の核心的重要性，「知識の最近接領域論」における「疑問」や「問い」の重要性を展開する。

「人間の働く10個の喜び」については，「おわりに」でまとめている。

１）働く見通しのある・働くことができる喜び
２）働くことで身体も精神も活性化し発達する喜び
３）働くことで創られたものやサービスを知覚する喜び
４）働くことで自分や職場の目標を達成したときの喜び
５）労働の成果が他の人に役立ったときの喜び
６）労働により他人だった人びとを知人として結びつける喜び
７）労働により社会にとってかけがえのない人間となる喜び
８）労働の成果を給料などとして得る喜び
９）労働の成果によって自己と家族の欲求・希望を実現する喜び
10）労働の成果によって自己と家族の新たな能力を伸ばす喜び

まず，具体例をあげて10個の内容を説明し，次に各人最重要３個に○をつけてもらう。その上で，札幌市内のいろんな分野の学生調査で圧倒的に第8の「給料」が７～８割で１位になるが，

約300名の同市の企業調査では，入社１～２年目は「給料」が１位だが，企業全体では第５の「他の人に役立つ」が１位となることを示す。とくに40歳以降では「他の人に役立つ」が圧倒的である。ここには，江戸時代に栄えた近江商人の「売り手良し，買い手良し，世間良し」が現代にも生きていることを示す。

最後に，人びとの絆を大切にする中小企業だからこそ為し得る，持ちうる「中小企業の誇り」について以下の５点を述べることとしている。

第１に，人間の働く10個の喜びをより直接的に強く実感しうる。

第２に，常に総合的，全体的視野や能力が求められ，かつ可能となる。

第３に，企業の関係者のみならず，地域社会の人々との豊かな関係を生涯もちうる。

第４に，企業の活動が世界の諸国民間の平和と友好の発展に貢献しうる。

第５に，企業の活動が回復不能な環境破壊をすることなく人類と自然の共存に貢献する。

（３）同友会大学60期卒業式

2012年８月24日午後６時，同友会大学第60期の講義が行われた「共同会館」（札幌市東区北６条東３丁目，札幌総合卸センター）で，卒業式と卒業祝賀会が開催された。卒業式には，卒業生44名のうち43名が出席し，さらに，受講者の所属する同友会会員企業の代表取締役や取締役部長など「保護者」12名が出席した。それに，北海道中小企業家同友会三神純一代表理事，同友会大学岡村敏之学長，担当講師の５名の教授，同友会大学赤裏茂同窓会長，後継者ゼミナール“喜望峰”寺田幸太郎代表世話人および同友会佐藤紀雄事務局長，伊藤浩事務局次長（同友会大学第60期担当）他が参加した。

祝辞の中で，三神純一代表理事は，今後とも学ぶことが若さを保ち続けることになり，今日の厳しい経済情勢のなかでも，同友会のモットーのひとつである“激動を友として”にもとづきプラス思考で前進してほしいと述べた。

岡村敏之学長（自身，同友会大学第１期卒業生）は，卒業は新しい学びのスタートであることとともに，第60期という節目の受講生が実に優秀であったことを強調した。まず，46名の入学者のうち，２名は，初めの２～３回のうちに仕事の都合で続けることができなくなり，そういう意味では，ほとんど，100％の卒業といっても良い。特別賞５名も画期的であるし，卒業生の半分以上24名が皆勤賞であることも素晴らしいことである。これは，講師の竹田正直教授がよく言う「皆勤して卒業できなかった受講者はいない」を実践したことになる。

講師の祝辞では，多彩な観点から自身の講義に関係付けて祝辞が述べられた。講義をひとつ聴いていると思えるほどの重みのある祝辞であった。筆者は，お祝いとともに，三神純一代表理事が述べた“激動を友として”を，さらに，一歩進めて，“ピンチをチャンスに！”へ挑戦してほしい。さらに，岡村敏之学長が以前，同友会の心臓は教育であり，教育の中心は同友会大学であると述べたことを紹介した。筆者が，入学式で述べた，①問いを持って学ぶ，②絆を持って学ぶ，③教えながら学ぶ，は，卒業後もぜひ，実践してほしい。中小企業にとって光と影があるにしても，中小企業の光，中小企業の良さに確信を持ってほしい。第１に，中小企業は，外国侵略などをせず，平和に貢献する。第２に，中小企業は，回復不可能な大規模自然破壊をせず，環境を守る。第３に，中小企業は，地域と社会の持続的発展と自社の発展を一体のものとして考え，地域貢献を実践する，と筆者は激励した。

ついで，卒業証書授与と特別賞が，一人ひとりに岡村学長から授与された。

赤裏茂同窓会長，“起望峰”舟田幸太郎代表世話人からの歓迎の言葉があった。

伊藤浩事務局次長講評は，60期卒業生44名を含めて卒業生総数は，2,330名となり，太田眞智子さんの優等賞（５回のレポート平均と卒業論文が80点以上）は16人目で，大変素晴らしい

レポートであった。努力賞（75点以上）も64人目，敢闘賞は，今回の３名を含め44名である。皆勤も多く実に優秀なクラスであったことが強調された。

最後に，優等賞を授与された太田眞智子さんが，受講者を代表して答辞を読み卒業式を終えた。卒業祝賀会は，いつも活気に満ちた開放感あふれた明るい雰囲気であるが，今回は，とくにその感が強かった。次に，優等賞となった太田眞智子さんの答辞を掲載する[39]。

受講者代表「答辞」

私たちは，同友会大学第六十期生として入学し，約七か月に及んだ講義グループワーク等の全過程を終え，今日晴れて卒業の日を迎えることができました。

今年は，記録に残る豪雪の年で，北海道では珍しく，二メートルを上る積雪を記録した地域もありました。入学式当日は，大雪のため列車の遅れで，何時間もかかり，遠方から駆けつけた受講生含め，第六十期生は例年を上回る四十名を越える受講生となりました。

中小企業家同友会のつながりの中で始めて出会うもの同士，緊張の中で自己紹介を行い，同友会大学への期待を語りあいました。会社・法人の自分に対する期待や，会社の中での，自分自身の役割を胸いっぱいに受け止め，不安の中で謙虚に学び獲得しようとする気持ちで出発をしました。

学びを共にしたグループの仲間は，時に作業着で，地方の現場から講義にかけつけ，また同友会の講義が終ったその足で，大きなトランクを抱え出張に向かいました。美容師をしている仲間は，昼休みはほとんど取れないといっていました。印刷業の仲間は，業界にとって難しい時代の中で，新しい模索と技術への情熱を語っていました。初夏の，運動会の時期には真っ黒に日焼けし，運動会での子どもの様子を話していました。皆労働者であり，家族を持つ生活者です。毎週火曜日の夜仕事が終わった後の時間に集まり学びを共にしました。今日卒業に当たり，同友会大学で私自身が，「学び，考えた事」を，感謝の気持ちをこめてお話したいと思います。

単元毎に，管理者として必要な知識や考え方を系統だて，講義いただきました。歴史を知り，大きな情勢の流れを理解したうえで，今を理解することが，先を見通す政策的な対応に欠かせないことであると学びました。中小企業憲章の経緯について，感動的に講義を受け，地域経済の活性化は，行政を巻き込むことが重要であることを学びました。法令を遵守する責任と経営を守ることは一体であり，経営は理念であることを繰り返し確認しました。人間味あふれる社長さんたちの，職員のやる気を引き出す職場の関係作りの実践的なお話など，毎回の講義の中で，たくさんの刺激や，当社や私自身を，繰り返し見つめなおす時間になりました。

私は在宅介護・住宅等の事業で仕事をしていますが，北海道は，急激な人口減の中で高齢化が進行し，長期的に住み慣れた場で最後まで安心して暮らし続けるということに，展望が持ちきれていませんでした。しかし，「十勝や別海の同友会の取り組み」等を学ぶ中で，関連事業や病院，近隣の住民という狭い枠組みの中で考えていることを痛烈に感じました。情勢をつかみ，何ができるかを柔軟な発想で，考える事が求められます。地域づくりは，異業種の連携の中で活性化し，産学官連携など，今後につながる大きな学びを得ました。

最後になりましたが，第六十期同友会大学で，貴重なご講演や，施設見学の企画をいただきました，同友会の会員の皆様，同友会事務局の皆様，忙しい中で研修に送り出していただいた職場の皆様など，全ての方に感謝申し上げます。また，何かの縁で，同じ学びの場を共にした六十期の卒業生一同が，長く様々な交流や励ましあいが出来るように，今後もつながりを持ちたいと思います。本日は，本当にありがとうございました。

平成二十四年八月二十四日
第六十期同友会大学卒業生代表　太田眞智子

おわりに

（１）小論で明らかすることが出来たのは，第１に中同協結成の影響で北海道同友会が結成され，今日に連なる活発な活動と理念の形成である。第２に故大久保尚孝氏の北海道同友会への参加とそれによる総合的人間力の形成をめざす社員教育への多大な影響である。第３に同友会大学の第１期と第60期をとりあげて北海道同友会の組織的，継続的な社員教育の一端を解明したことである。

（２）しかし，残された課題も大きく，第１に同友会大学の全期の分析が未解明であるし，第２に北海道同友会の経営者大学やマナー教室など他の多様な社員教育形態の分析がある。第３に大久保氏の影響は，北海道同友会も未消化であるが，中同協への影響は間接的なことにとどまり未解明である。また，紙幅の関係で筆者の講義内容は概略のみとした。

なお，本論文の執筆にあたり資料その他，国吉昌晴中同協副会長や中同協事務局の方々，細川修北海道同友会専務，佐藤紀雄事務局長はじめ事務局の方々に多大なお世話になったことを記し，深く感謝する。

1）一般社団法人北海道中小企業家同友会『激動をよき友に－大久保尚孝さんと同友会』，2013年３月22日刊，50～51頁。
2）中同協の，2013年第１回社員教育委員会が，2013年８月29日（木）午後１時から，東京，中野サンプラザでおこなわれ中同協からの依頼で，筆者は「北海道における中小企業家同友会の教育」の講演を行った。また，その講演をもとに『企業環境研究年報』（2014年）への本論文の執筆を依頼された。なお，講演は，公刊した２つの小論，竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育」（北海学園大学開発研究所紀要『開発論集』第90号，2012年９月刊）と竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育（２）」（北海学園大学開発研究所紀要『開発論集』第92号，2013年９月刊）を基礎に行った。
3）中同協30年史編纂委員会『中同協30年史－時代を創る企業家たちの歩み』，中小企業家同友会全国協議会，1999年７月８日刊，13～14頁。
4）同上，14～15頁。
5）東京赤坂プリンスホテルにて出席35名，会員数70名。同上，37頁。
6）東京商工会議所ホールにて開催した。同上，77頁と319頁。
7）この評価は，基本的に，「全中協」中央常任委員山口松三郎氏の当時の評価に依拠しているが，山口氏の評価自体が硬さや矛盾を含むものである。同上，『中同協30年史－時代を創る企業家たちの歩み』，20～22頁参照，句読点は筆者。
8）大久保尚孝「いま，新しい歴史の幕が」，北海道中小企業家同友会創立30周年記念誌『共学・共育・共生の30年』，北海道中小企業家同友会刊，1999年11月12日，132～133頁。
9）大久保尚孝「先輩同友会に誘われて」，北海道中小企業家同友会創立30周年記念誌『共学・共育・共生の30年』，前掲，23頁。
10）大久保尚孝，前掲同。
11）前掲同。
12）北海道中小企業家同友会『同友会ニュース』，創刊号，1969年12月刊，規約全文は12～13頁。目的は12頁。
13）前掲同，12頁。
14）前掲同，18頁。資料の原文は，役員選考委員の数が合わない。合計６名ではなく，５名である。もし，６名が正しければ，何処かの都市が１名多くなる。
15）前掲同。
16）前掲，『同友会ニュース』，第４号，1970年５月１日刊，４頁。
17）一般社団法人北海道中小企業家同友会『激動をよき友に－大久保尚孝さんと同友会』，前掲，34～35頁。
18）管見では，満蒙開拓青少年義勇軍に関するもっとも優れた研究は，白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』，北海道大学図書刊行会，2008年２月25日刊，である。
19）一般社団法人北海道中小企業家同友会，前掲，35頁。
20）前掲。37～44頁。
21）前掲。49～50頁。
22）インタビュー，大久保尚孝氏に聞く「同友会における社員教育（共育）運動について―その社会的，歴史的価値を考える」，『新・共に育つ』，中小企業家同友会全国協議会，2012年11月１日刊，121～139頁。
23）前掲同，122頁。
24）前掲，『激動をよき友に－大久保尚孝さんと同友会』，2013年３月22日刊，９頁。
25）前掲，『新・共に育つ』，中同協，2012年11月１日刊，124頁。

26）前掲，同，124～125頁。
27）前掲，同，130～131頁。
28）国吉昌晴編集責任『未来へのはばたき，同友会大学第一期生の記録』，北海道中小企業家同友会刊，1981年７月，43頁。
29）『北海道新聞』，1981年５月15日，前掲，同，43頁より重引。
30）前掲，同，19～21頁。
31）前掲，同，２頁。
32）前掲，『新・共に育つ』，中同協，2012年11月１日刊，124頁，再掲。
33）竹田正直「集団主義教育の立場と今日的観点」，『ソビエト教育科学』第23号，1964年12月25日刊，128～133頁。
34）北海道中小企業家同友会，西谷博明責任編集『北海道中小企業家同友会創立30周年記念誌，共学・共育・共生の30年　1969～1999年』，㈱アイワード印刷，1999年11月12日発行，１ページ。
35）前掲，７ページ。
36）前掲，275～278ページ。
37）前掲，256ページ。
38）同友会大学第60期卒業祝賀会で三神純一代表理事から，筆者が直接お聞きした。
39）同友会事務局の許諾と本人の許諾も得て，太田眞智子さんの答辞を掲載する。なお，答辞原文に「産学間連携」とあったが，太田氏に確かめ，「産学官連携」と訂正した。